

検証授業のまとめ1 活動例 地理B 「日本の位置」

1 実施状況

- (1) 実施日時 平成17年12月16日(金) 午後2時30分~3時20分
- (2) 対象：東京近郊の中学校の1年生
韓国人の生徒2人、フィリピン人の生徒5人、中国人の生徒3人 計10人
- (3) 活動例 地理B 「日本の位置」

2 検証授業のねらい

地球儀や世界地図を主な教材として日本の絶対的な位置や相対的な位置を様々な面や角度から考察していく授業を進める際、日本語を母語としない生徒へどのような学習活動の工夫や教師の支援が必要なのかについて検証する。

3 検証授業の実際

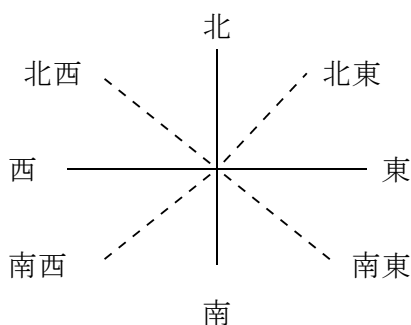
日本語を母語としない生徒にとっては、難解な語彙や言い回しが学習内容を理解する上で障壁となる。思考し判断して理解していく過程でこの障壁を乗り越えるため、日本語を母語とする生徒よりも多くの工夫や支援を施す必要がある。そこに視点をあて、今回は地球儀、世界地図、白地図を主な教材・教具として、学習体験を通じて学習内容と日本語の語彙や言い回しの理解を図っていくための工夫・改善策を検証していった。

<導入時>

今回は教具を地球儀に絞って母国と日本の位置を確認させ、そこから日本と母国の相対的な位置や共通する特徴などを考え日本語で表現させていった。「韓国は日本のとなりにある国です。」「中国は日本よりもとても大きい国です。」「フィリピンと日本は島です。」この時点で生徒は本時の授業に興味を示した。

<展開>

地球儀を使って学習活動を進めていったが、はじめに平面上の方位の基礎・基本的な事項について確認した。



方位について理解しているが、日本語が障壁となって表現できない生徒が見られ、予想以上の時間を要した。日本語の語彙、例えば南西を西南と表現してしまうというようなことがあったが、学習内容の理解はできているが表現を誤っているだけであって、日本語を母語とする生徒でもしばしばあることである。しかし、母語では表現することができることを前提とすれば日本語が障壁となっていると考えられ、その点で反復した指導が必要である。

次に地球儀上の方位で日本と母国の相対的な位置関係を理解するため、紙でつくった十字の教具を配布して東京から見た母国の方位やアメリカ合衆国の方位を確認する学習を行った。やり方を一通り説明した後、学習活動に入り、分かった方位を表現させた。最後に黒板に事前に貼り付けた正距方位図法により、答えが正しいかどうか検証した。このような作業的な学習の場合、日本語を母語としなくとも体験的、視覚的に理解できることが分かった。

次に緯線、経線に基づいて日本と母国の位置を確認する学習を進めた。学習に先立って、学習の前提となる基本的な知識について学習した。あらかじめ次の語彙のカードを用意し、地球儀、世界地図を利用して説明した。

いせん	けいせん	ほくい	なんい	とうけい	せいけい	せきどう	ほんしよしごせん	きたはんきゆう	みなみはんきゆう
緯線	経線	北緯	南緯	東経	西経	赤道	本初子午線	北半球	南半球

これらの難解な語彙を理解することは、日本語を母語とする生徒でも容易ではない。日本語を母語としない生徒にとって、かなりのストレスとなることが予想された。事実、困惑した表情となった生徒もいた。しかし地球儀と世界地図で視覚的に説明し、さらに学習を進める中で反復することにより、おおまかに理解できた。

また、地図帳を使用して、日本の東西南北の端となる島を見つけさせ指で指させた。さらにそれらの位置を緯度、経度で表現させていった。

「日本の北の端は、およそ北緯46度です。」

「日本の東の端は、東経154度です。」

白地図に北緯20°、北緯46°、東経154°、東経123°の線を色鉛筆でなぞる作業を各自で行い、日本と同緯度上、同経度上の国々を地図帳を併用しながら確認し、記入する作業を行った。今回はあらかじめ学習の補助となる国の形を描いたカードを用意した。その形を参考にしながら、各自それらの国々の位置と名称発見することができた。ここで授業時間が終わりとなり、日本のまわりの地形名、日本や母国の面積調べ等の学習は、残す形となった。

- ① 本時の目標 地球儀や世界地図を使って、日本の相対的、絶対的な位置の特徴を多面的、多角的に考察し、理解させる。
- ② 本時の展開

	学 習 活 動	・指導上の留意点 ★教材	○日本語支援の例 (種類)
導入	① 日本と母国の位置を確認する。	・世界地図や地球儀で日本と母国の位置を指で示させ、気付いたことを発表させる。 ★地球儀、世界全図(地図帳)	○生徒の発言を、地理的な語彙に言い換えるなど、適宜支援していく。(表) 例「フィリピンは日本の下の方です。」→南西
展開	② 地球儀で日本の位置や特徴を考察する。 ③ 世界地図で緯度と経度から日本の位置と特徴を理解する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">生徒の学習状況によっては、地球儀で1時間、地図で1時間扱いで行うと効果的だと感じた。ただし、限られた時間の取り出しでは、それは困難かもしれない。</div> ④ 日本と同緯度、同経度の国々を世界地図で調べ、理解する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">今回は、学習を補助するため、主な国の形を示したカードを用意した。</div> ⑤ 日本のまわりにある海の名称、半島や島を調べる。 ⑥ 日本と母国の面積を調べる。	・地球儀を見る上で必要な基礎知識を確認する。 ・日本と母国の位置、方位、について調べる ★地球儀、ワークシート <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">地球儀を活用して、東京から見た母国やアメリカの方位を学習したが、活動することにより日本語が不十分な部分を補うことができたようだ。</div> ★地図帳、白地図、ワークシート ・日本と母国の位置を地図で確認し、白地図に色鉛筆で塗らせる。 ・白地図に、東経123度、154度、北緯20度、46度の緯線、経線を記入させ、日本の領域をつかませる。 ・北方領土の現状について触れる。 ・日本の領域は、領海を含めると広範囲であることに気付かせる。 ・同緯度上の国は、アジア、ヨーロッパ、北アメリカにある主な国とする。 ・白地図とワークシートに学習の成果を記入させていく。 ・日本は世界191カ国中60番目の大きさであることに触れる。	○「緯線」「経線」を板書してルビをふり、基礎的知識を確認する。(理) ○「緯度」「経度」「東経」「西経」「北緯」「南緯」「赤道」「北半球」「南半球」のルビをふったカードを用意し、地球儀、白地図の上に示す。(表) ○日本の東端、西端、北端、南端の緯度、経度を世界地図上で見つけさせ、日本語表現させていく。(表、理) →問いかけ・応答の例 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">白地図を活用した作業では、難解な日本語の語彙にとまどい活動が止まってしまった生徒が見受けられた。しかし参観の先生方の協力で、全員、緯線、経線などの記入をすることができた。</div> ○自由発見した国をを音読させて、適宜褒めていく。(情) ○主な国の白地図を示し、緯線、経線上の主な国を整理していく。(理) ○あらかじめ、ルビをふった自然地形名を記したカードを用意する。(理) ○面積の単位(～万平方キロメートル)についてあらかじめ示す。(理)
まとめ	⑦ 学習して分かったことを、整理し発表する。	・ワークシートに記入された学習の成果を、日本語で音読させて理解を深めさせ	○発表について、褒める姿勢で臨み、自信や成就感を持たせる。(情)

今回は、地球儀のみで母国の確認を行った。同じ母国の生徒同士で助け合っていた。

地球儀を活用して、基本的な知識の確認を行ったが、難しい語彙が多く、来日してからの期間が短い生徒には、じっくり時間をかけて指導する必要がある。

反省点：黒板を活用して基本的な語句について、読み方の確認をすべきであった。

反省点：作業前に繰り返し、地図上の横の線が緯線、たての線が経線であることを確認する必要があった。教師の支援の在り方について…日本語の問題でつまづいているのか、社会科の基本的な知識や考え方の部分でつまづいているのかを、把握する必要がある。その点を見極めるてだてを、書き込むことはできないだろうか。

今回の授業は日本と同緯度、同経度上にある国をさがして記入するところで終わった。生徒の学習状況によって、2時間扱いにするなど臨機応変に対応すべきだ。

<キーワード> 緯度 経度 緯線 経線 東経 西経 北半球 南半球 領土 領域

4 検証授業で明らかになった点

- (1) 日本語を母語としない生徒には、学習内容を作業や体験に基づいて理解させていくことが有効であること。
- (2) 作業や体験を通して学習内容を理解できても、難解な語彙はなかなか定着しづらいこと。
- (3) 学習内容を理解する上で、日本語によるつまづきがあることを前提として、ルビをふったカードや平易な言葉に言い換えた資料を準備することは必須であること。
- (4) 日本語の語彙が分からないことによるつまづきなのか、学習の前提となる基礎・基本的な事項を理解していないことによるつまづきなのか把握し、それに応じて臨機応変に学習展開のバリエーションを変えていく必要があること。
- (5) 今回の検証授業では、同じ出身国の生徒同士で分からないことを質問したり、母国語でいてねいに説明している姿が多く見られた。同じ言語を母語とする生徒が複数いる条件の場合、生徒同士の助け合い学習は有効な補助となること。
- (6) 社会的事象等を日本語で書いていく作業は、予想以上に時間がかかること。ワークシート等にポイントを絞って書き込ませたり、あらかじめカード化し、視覚的に理解させたり音読させたりする活動が有効である。

5 今回の授業を通して改善・工夫した点

- (1) 教材・教具を通して、作業的・体験的に学ばせる。
- (2) 取り出しの授業では、思い切った学習内容の精選を図り学習のポイントを明らかにし、在籍学級の授業に参加するためのスキルや能力を培う。
- (3) 母国の関連した事項をできるだけ取り上げ、興味・関心を持たせる工夫をする。
- (4) 黒板を有効利用し、口頭では理解しづらい語彙をルビ入りで書いて説明する。
- (5) ルビ入りのカードや国の形を記したカードなどを用意して視覚から理解できるように工夫する。
- (6) 生徒の負担を軽減するため、ワークシートにはポイントを絞って書き込ませ、あらかじめ語彙や文章をカード化し、音読させるなどの工夫をする。
- (7) 適宜、反復学習を入れて難解な日本語の語彙を理解させる。